

はしがき

園部逸夫さんのおつき合いは長い。もう四半世紀を超えるだろう。ひよんなことで、園部さんとの接触があり、その後、「タテ社会をヨコに歩く人生」を実践されている園部さんに、研究会の組織化を申し出た。

アメリカ仕込みのオーラル・ヒストリーを始める前提として、最高裁判事になられた園部さんとあの白亜の殿堂の重厚な趣のある裁判官室で、司法と政治をめぐる研究会を是非ともやりたかったからだ。園部さんは快諾。村松岐夫、前田雅英、玉井克哉、荻部直といった面々と、月一回平均の研究会を四年余続け、政治学的観点からの司法へのアプローチを進めていった。

一九九九年三月、園部さんの最高裁退官と同時に、オーラル・ヒストリー・プロジェクトも始動し始める。きっかけは、むしろ園部さんのお誘いである。園部さんの要請で四月三〇日付読売新聞に、私がインタヴューとなって、「司法制度と最高裁」をテーマとする記事が掲載された。かくて今を去ること十年前、園部さんへのオーラル・ヒストリーは、二年かけて行われ、また関連して園部さんのご紹介で、元最高裁長官の矢口洪一さんへのオーラル・ヒストリーも始まった。

どちらのオーラル・ヒストリーも、報告書のスタイルで研究者用に少数数を印刷に付した。知る人ぞ知る存在となった園部さんは、二一世紀になってなお、「タテ社会をヨコに歩く」活動をされた。小泉内閣下で「皇室典範に関する有識者会議」の座長代理となり報告をとりまとめられ、関連して「皇室法」をテーマとする二冊の著書をモノされた。その後も、野田内閣の下で内閣官房参与として皇室制度の今後のあり方について積極的関与を試みられた。

この十年間の活動については、当然オーラル・ヒストリー報告書に記載はない。しかし園部さんらしい「タテ社会をヨコに歩く」人でなければできぬ仕事ぶりであったと、オーラル・ヒストリーを読み直してみると、改めてよく分かる。近年の園部さんは、熟成の域に達せられた。それでいて枯淡の境地という程達観はされていない。今ある現実に対する変革への意欲というものが、それとなしに伝わってくるからだ。

そんな園部さんのオーラル・ヒストリーが法律文化社との縁で、公刊されることになって、とてもうれしい。園部さんの洒落なモノ言いに再び接することができて、オーラル・ヒストリーの意味を考え直す契機ともなった。また最高裁の来し方行く末を示す道標でもあり続けていると信ずる。

二〇一三年四月